

選考委員賞

同じ生きものということ

赤坂中学校 上村 真白

私はミミズが嫌いでした。しかし、これは見た目が気持ち悪いからというだけのことでした。ミミズが私たちにとつて、大切な存在であることを知らずに。よく、「ミミズがいる土はいい土だ。」と言われます。ミミズは、栄養がたくさん詰まった落ち葉などを食べます。単に、落ち葉が土に落ちていたとしても、葉が大きすぎて肥料にはなりません。しかし、ミミズが食べることにより葉が細かく分解され、それが糞となり、土に排出されます。よって、栄養がたくさん詰まった土が出来上がり、そこで作物が作られ、私たちのもとへと運ばれます。これを聞くと、ミミズが私たちの生活に関わっていることが分かるでしょう。ミミズのお影で美味しいものが食べられるのです。

生きものは、それぞれ生きていくことに意味があります。生きなくていいものは、一ついや、一人たりともいません。ここで何故、「二人」と私が数えたか。どの生きものも、人間と同じ扱いをしてほしいからです。先程のミミズのように、自分より小さくて、弱い立場のものも、生きていくという大きな括りで見えてほしいと思います。立場や大きさなどは関係ありません。生きていくということだけで、みんな仲間なのです。

金子みすゞさんの詩で、こんな詩があります。「みんなちがって、みんないい。」とても有名な詩でしょう。私はこれを見た時、何か感じるものがありました。先程の話と繋がりますが、みんなちがうからこそ、この世の中が成り立つのであり、それを認め合い、生きていくことが大切なのです。私も含め、今の人たちは、虫が嫌いです。が、見た目であれこれ判断をするのではなく、お互いを認め合い、同じ生きものなんだということを自覚し、共存していける社会を作らなければならないと思います。そのためにも、一人一人が、認め合う努力をしなければいけません。それが、心地良い、共存社会を作っていく第一歩だと思います。

講評

身近な「生きもの」から『気づき』そして『感じた』、中学生らしい意見です。